

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520956

研究課題名(和文) ライフヒストリー分析によるアフリカ焼畑社会の出生力変異の解明

研究課題名(英文) Explanation of fertility variation by life history analysis

研究代表者

佐藤 廉也 (Sato, Ren'ya)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：20293938

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、伝統的に低出生力であったアフリカ焼畑社会を主な対象として、個人の生活史(ライフヒストリー)に着目することによって、ライフイベントの個人差・世代差と出生力変異との相互関係を明らかにし、「生業と人口の関係」という問題を解明することを目的とした。収集・集めた様々な世代のライフヒストリーデータを分析した結果、焼畑民が定住化し国家に包摂された結果、出生力が顕著に上昇したことがわかり、低出生力の近接要因が結婚年齢の高さや長い出産間隔にあり、その究極的な要因は頻繁な移住をともなう焼畑民の生業形態と生活史にあることが実証された。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to explain the cause of low fertility among shifting cultivators in East Africa by analysis of their life histories (especially individual life events such as marriage, childbirth, divorce and death). This setting ultimately meant to solve the question how fertility was related to subsistence strategy. The result of analysis of life history data among various generations showed the transformation from low fertility to high fertility after sedentarization with which they had changed their former settlement pattern of high mobility. Proximate causes of fertility change were earlier timing of marriage and shortened birth interval. It can be explained that ultimately the causes of low fertility among traditional shifting cultivators were their subsistence patterns and life history traits.

研究分野：地理学

キーワード：ライフヒストリー 出生力 人口学 アフリカ エチオピア

1. 研究開始当初の背景

「焼畑社会や狩猟採集社会のような小さな生業社会の女性は、何歳頃に結婚し、生涯に何人の子どもを産むのだろうか?」「生まれた子どもの何人が生き残り、大人になって結婚するのだろうか?」「焼畑、牧畜、定住農耕などの『生業形態の違い』が出生力にどのように反映するのだろうか?」「現代日本におけるライフコースや出生力との違いは何に由来するのだろうか?」

研究代表者は1992年以来、アフリカ焼畑社会の生業基盤およびその歴史動態の研究を続けるなかで、上記のような素朴な疑問を持つようになった。例えば歴史資料の残存する定住農耕社会については、近世の日本やヨーロッパを対象として歴史人口学による復元研究が進められている(速水編 2003)。一方、狩猟採集や焼畑などを生業とする小規模な社会には出生記録や統計が存在しないため、これらの社会における人口動態は未解明の部分が多いものの、人類生態学者のフィールドワークによる人口動態の復元研究(Howell 1983; Hill and Hurtado 1996)や、ミッションの出生記録をもとに人口動態を復元した研究(Early and Headland 1998)などが存在する。また、生業形態の違いと出生力の関係については、人類生態学者による比較研究があり、それらの一部では狩猟採集社会・焼畑社会と定住農耕社会の間には統計的に有意な出生力の違いが見られるとしている(Bentley et al. 1993)。以上の研究は集団における出生力、あるいはその集団間比較による研究であるが、生業と出生力の関係をめぐっては議論が続いている。これに対して研究代表者は、集団内の個人差・世代差に着目して、ライフヒストリーの諸要素から小規模な生業社会の出生力を説明することが可能なのではないかと考えてきた。

2. 研究の目的

本研究は、伝統的に低出生力であったアフリカ焼畑社会を主な対象として、個人の生活史(ライフヒストリー)に着目することによって、ライフコースと出生力との相互関係を明らかにし、文化地理学・歴史人口学・人類生態学において議論されてきた「生業と人口の関係」という問題を解明することを目的とする。とりわけ、「青少年期の技術習得」「結婚と出産・子育て」「子どもが成人する壮年期・老年期」などの生涯の主要なステージに着目し、個人間・世代間の違いおよび男性・女性の違いが出生力の変異にどのように影響しているのかを、収集したライフヒストリーデータの定量的・定性的分析によって明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、青少年期の生業技術習得から結婚・出産・子育て、そして自らの子どもが成人して結婚する壮年期以降までに至る、トータルな個人史との関連で、出生力の個人差・性差・世代差を明らかにすることを目的としている。具体的には以下の3つの点を順に遂行した。

タルな個人史との関連で、出生力の個人差・性差・世代差を明らかにすることを目的としている。具体的には以下の3つの点を順に遂行した。

(1) ライフヒストリーデータの収集と集成、およびライフイベントに関するデータベース作成。これまでに研究代表者が構築したエチオピアの焼畑民・マジヤングルの結婚・出産歴データベースを基礎として、さらに各世代の女性・男性にロングインタビューを実施し、出生地・移住歴・兄弟姉妹などの基礎的属性とともに、子ども期から現在までのライフヒストリーを聞き取り、それらを翻訳して個人別ライフヒストリーファイルとして集成する。さらに、その中で主要なライフイベント情報を抽出して定量的分析のためのデータベースを作成する。

(2) データベースを用いた分析と「出生力に影響を与える諸要素」の解明。構築されたデータベースをもとに、各個人の出産歴と、その他の諸要素の関連性を統計的に分析し、同時に結婚・出産のパターンを類型化し、それぞれのグループのライフイベント要素の相違を詳しく検討し、それぞれのグループの出生パターンに影響を与える要素を特定する。

(3) 環境・生業を異にする集団との比較と予察。マジヤングルと生活環境や生業を異にする集団について、現地を訪れライフヒストリーに関する聞き取りを行い、生業によって異なるライフヒストリーと出生力との関係に関する予察的な考察を行う。

4. 研究成果

(1) 移動農耕民の低出生力

まず、対象とする集団(焼畑民マジヤングル)の1970年代以前の出生力について、50歳以上の女性の出産歴から、1人当たりの生涯出産数が平均4人に満たないことがわかった。いわゆる伝統社会のなかではかなり低い数字である。その直接の要因は、初婚年齢が高いこと、出産間隔が長いことであった。離婚の頻度もきわめて高い。

隣接する集団では、結婚が男性親族によって厳しくコントロールされ、夫婦の年齢差が大きい社会が少なくない。そうした集団に比べ、マジヤングルは結婚に本人の意思が反映される余地が大きい。夫婦の年齢差も小さく、離婚は主に女性側の意思によって頻発する。また出産間隔が長いのは、「年子を産むと上の子が腐る」と表現される産後の性交渉の禁忌が原因の1つであり、乳児が離乳するまでの間は夫が望んでも妻は性交渉を断ることができる。こうした様々な文化的要因が初婚年齢の高さ、ひいては低出生力に結びついている。

マジヤングルの合計特殊出生率と初産年

齢を、詳細な人口調査の結果が報告されている他の小規模社会と比較すると、合計特殊出生率の値はマジヤングルがもっとも低く、初産年齢の値はもっとも高い。狩猟採集社会において少産社会の典型とされるクンの社会でも、出生力は4.7人であることを考えると、マジヤングルの低出生力の要因については何らかの説明が必要であろう。ただし、初産年齢において1940年代生まれの女性の高年齢がきわだっているのと同様に、合計特殊出生率についても、1940年代生まれの女性(TFR=3.3)と1930年代以前生まれの女性(TFR=4.6)の間には差異がある。定住化以前のマジヤングルの低出生力が、20世紀全般あるいはそれ以前からの常態なのか、それとももっと狭い特殊な一時期の現象なのかについては、注意を払う必要があるだろう。

以上のデータは初産年齢について示したが、低出生力の要因には当然出産間隔があると考えられる。マジヤングルの人々の間には、出産や育児に関するいくつかの規範が存在する。例えば、彼らは子供が生まれると、子供が離乳して自由に歩けるようになる3歳までは性交することを禁ずる。上の子供が離乳する前、とりわけ2歳以前に次の子供を妊娠する(彼らは年子をkootetと呼ばれ、避けるべきものとしている)と、上の子が「腐ってしまうmojeng」という。彼らは3年から4年の出産間隔が理想であるという。この性交に関する規制がどの程度守られてきたのかは不明である。マジヤングルの夫婦が性交をおこなうにあたっては、男性が主導権を握るのが一般的であるから、規制が守られないこともしばしばあるだろう。ただし何人かのマジヤングルは、「普通は妻は夫の性交の要求を拒否できないが、乳児がいる場合は別だ」と指摘する。

このような規範が存在する背景には、何らかの理由があるのだろうか。彼らは、出産間隔が必要であることの理由のひとつに、移動の必要性をあげる。彼らは「子供を2人も3人も背負って森を歩くことはできない」「サバナのアニューワ人が攻めてきた時に、赤ん坊が二人もいたらどうやって逃げるんだ？」などと言う。先に述べたように、定住化以前のマジヤングルは頻りに集落を放棄して移住する人々であり、その理由の多くはアニューワ人からのレイディングを含む社会的な軋轢であった。規範の背景にこのような社会的要因があるとすれば、それらの要因が緩和された定住化以降にそれが変容する可能性がある。出産間隔についても世代による違いを検定した結果、定住化を経験した世代とそうでない世代の間には有意差が認められた。定住化によって、初産年齢の低下とともに出産間隔も短縮していることが明らかになった。

(2) 定住化による出生力上昇
次に、マジヤングルが定住化する以前の出

生力と定住化以後の出生力を、世代間のデータによって比較した。1950年代以前生まれの女性と1960年代以降生まれの女性の2群に分けてウィルコクスの順位和検定(2つの数値群のあいだの偏りの有無を調べる検定方法)をおこなったところ、有意差が認められた。この結果は、定住化後に出生力が上昇している可能性が高いことを示すものである。また、出生時から定住村で過ごしてきた世代である1980年代以降の女性になると、さらに初産年齢が低下しているように見える。旧世代のマジヤングル女性の多くは20歳以降に結婚して最初の子供を産む。1970年代生まれの出産経験のある女性36人のうち、10代で出産した者は5人(13.9%)にすぎない。ところが1980年から84年の間に生まれた出産経験のある女性36人のうち、10代で出産した者は23人(63.9%)にも達する。

(3) 大人になるまでの年齢

定住化以前の移動生活における低出生力の遠因と考えられるのが、彼らの「大人へのなりかた」である。男の子は6歳前後になると、生業技術を森で遊ぶことから始めて大人になるまでの間にゆっくりと習得する。例えば、最も重要な現金獲得手段である蜂蜜採集について、妻子を養うのに十分とされる量の蜂蜜を獲れるようになるのは、ようやく30歳に近づく頃である。大人になるまでの時間が長く、生産力のピークに達する年齢が比較的高いことも、結婚・出産・育児のパターンに影響を与えている。

(4) 様々な社会の生涯

最後に、マジヤングルといくつかの小規模社会、さらには日本の生涯パターンを比較した。

マジヤングルが成人するまで生き延びた場合、70歳以上まで長生きする人も珍しくない。徐々に力は衰えるが、多くの老人は焼畑の伐採を続ける。夫方居住の傾向が強いため息子夫婦との関係が生涯続き、老女は孫の世話によって家計に貢献するケースも多い。マジヤングルも私たちの社会と同様、病気によって生涯を閉じるケースがおよそ7割を占めるが、そのほかには他人からの暴力や仕事中の事故によって命を落とすケースも目立つ。

生存曲線を参照すればわかることだが、現代日本人の男女の生存率の高さは伝統社会や小規模社会のそれに比べ突出している。その一方、明治時代の日本人も、狩猟採集民アチュヤクンも、年齢別生存率は大きくは変わらないように見える(いずれも乳児死亡率が寿命を引き下げる主要因である)。現代の先進国社会は人類史上かつてない長寿社会なのだと言って差し支えないだろう。そしてそれは乳幼児死亡率の低下によって達成されたのである。また、乳幼児期の死亡リスクを克服して大人になって以降の死亡リスクは、狩猟採集社会でも高くはない。マジヤングル

の社会においても、80歳を超えて長生きする人々も決して稀ではない。死亡リスクの高さだけを見れば、マジヤングルよりも現代人の60歳以上の高齢者の方が高リスクである。これは三大疾患に代表される成人病のためである。

生存曲線の比較においてもうひとつ目をひくのは、男女の死亡率の違いである。現代日本人の男女の曲線を見ると、ほとんど全ての年齢において女子の生存率が男子を上回っている。これは世界の人口統計に広く見られるパターンで、男子は出生時から女子よりも常に死亡のリスクが高いことが知られている。ところが、パラグアイの狩猟採集民アチェを見ると、40歳くらいまで常に男子の生存率が女子を上回っている。アチェのケースは、女兒殺しと女兒ネグレクトの影響を反映するものである。

パラグアイ政府と接触する以前のアチェは、子殺しの習慣があった。生まれた子供が小さい、容貌が良くない、髪が少ない、あるいは上の子との出産間隔が狭い、などの理由で、子供は生きて埋められることがあった。また、大人の死に際して、子供を殺して殉葬する習慣があった。この殉葬の対象には女兒が選ばれることが多かったという。Hill and Hurtado(1996)の冒頭には、人食いジャガーに夫が食い殺された直後に、その妻が産んだ子供がバンドの人たちに生き埋めにされる生々しいエピソードが紹介されている。アチェの生存曲線は、このような女兒に偏った子殺しを反映しているのである。

マジヤングル、クン、アチェ、ヤノマモ、アグタの5社会について死亡原因を比較した。アチェの人々において、他人の暴力によって命を落としている割合の高さは突出していた。子供の場合、先に述べた乳児・幼児・子殺しの犠牲者が多く、15歳未満の実に63.5%が他人の暴力で亡くなっている。アチェの場合は子殺しだけに限らず、大人も暴力によって命を落とす人々の割合が高い(15~59歳の45.6%、60歳以上の33.3%)。子供の暴力による死が女兒に傾いているのに対して、大人の場合は男性に傾いている。Hillらによれば、成人の暴力による死の多くは棍棒の戦いの結果である。アチェの人々は他者に対する怒りの解決に、このような方法をとるが、その結果死に至る事例も稀ではない。また老人の場合には、病気や老衰によりバンドの移動についていけなくなった人々は生きたまま埋められたり、移動時に置き去りにされたりしたという。

ヤノマモの民族誌を初めて描いたナポレオン・シャグノンはその民族誌の副題に「獰猛な人々」とつけ、ヤノマモ社会における日常的な暴力を強調したが、統計を見る限り、アチェの事例のように暴力の結果としての死は際だっていない。Hillらは、アチェの統計に暴力による死がこれほど際だっている理由として、それが国家との接触前の状況を

あらわすものだからだと述べている。ヤノマモの統計は主にベネズエラ政府と接触した後の人口動態をあらわすものである一方、アチェは国家と未接触であった時期のものである。クンのデータについても、おおむねイギリス植民統治の影響を受けた時期で、国家に包摂された後の変容を予想させるものである。マジヤングルの場合は国家に属していないが、周囲の社会は少なくとも20世紀初頭からエチオピア帝国やイギリス植民地政府の影響を直接間接に受けていることは確実である。あるいはクンやマジヤングルのような少産少子の人口パターンがより以前の社会を反映するものだとしても、アチェのような社会内部の暴力を伴う多産多死の人口パターンもまた、かつての人類社会のひとつの類型だったのであろう。アチェの事例は人類史の陰の部分に存在する暴力の跡を私たちの胸に鋭くつきつけるものである。

アチェのデータを除いた残りの4つの社会は死亡原因にそれほど大きな隔たりはなく、殺害に関する報告がないクンは例外として、圧倒的に病気によるものが多く、殺害による死、事故死がそれに続く形になっている。マジヤングルの場合も、アチェと同じように新生児殺しの事例が少数ながら見られる。例えば、新生児がみつ口だという理由で殺された事例や、父親が認知しなかったという理由で母親によって殺された新生児の事例を聞き取りによって得た。しかし、これらの事例は少数であり、「殺害」のカテゴリーに含まれている大半は成人後に殺された事例である。殺害の原因は酒宴での喧嘩が高じて起こったものや、他民族からの襲撃によるもの、血讐の犠牲になったものなどがある。なお、マジヤングルの死亡原因として「その他」に分類される項目は、行方不明者を死亡としてカウントしたものである。ある女性は、子供の頃に2人の兄弟を近隣民族(アニユワ人)にさらわれてしまった。母親も同時にさらわれたが、後に一人で森に逃げ帰った。女性自身は、たまたま仕事の手伝いで集落を離れ、森にいたので一人襲撃を免れたのである。1950年代頃までは、このような近隣からの略奪によって奪われた命も少なくはなかった。

事故死についてもふれておく。事故死の多くは生業にかかわるものである。特に目立つのが、蜂蜜採集をしていて高木から墜落したもの、狩猟の時にあやまってパートナーを槍で突いてしまったもの、そして森や畑での作業中に毒蛇に噛まれて亡くなったものである。蜂蜜採集や狩猟の事故はほぼ男性に限られるが、毒蛇の被害は男女問わず現在でもしばしば発生する典型的な死亡事故である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

Sato, Ren'ya (2016) Process of villagization and forest-living tactics among nomadic shifting cultivators (the Majangir) in lowland Ethiopia. *Senri Ethnological Studies*. (近刊・受理済み・査読有)

佐藤廉也(2014)「エチオピア南西部の森林農耕民マジャンギルの植物利用と認知」地球社会統合科学 21: 1-28. (査読有)

〔学会発表〕(計 4 件)

佐藤廉也(2015)「地理資料・GIS を用いてみる森と焼畑の動態」人文地理学会第 140 回歴史地理研究部会. 2015.9.26.甲南大学.

Sato, Ren'ya (2014) Process and effects of sedentarization among nomadic shifting cultivators: case from the Majangir, lowland Ethiopia. IUAES 2014 (The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences) Chiba: 2014.5.15.

佐藤廉也(2013)「森林移動農耕民における結婚と出生力の性差 エチオピア低地・マジャンギルの事例」日本人口学会第 65 回大会(札幌市立大学) 2013.6.1.

佐藤廉也(2013)「エチオピアの移動農耕民における成長と結婚」日本アフリカ学会第 50 回大会(東京大学) 2013.5.25.

〔図書〕(計 9 件)

佐藤廉也(2016)「人類学における科学と反科学」田中良之先生追悼論文集編集委員会編『考古学は科学か?(上)』中国書店、21-34 頁。

佐藤廉也(2014)「森棲みの焼畑民が大人になるまで エチオピア森林焼畑民の生業と生活史」池口明子・佐藤廉也(編)『ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第 3 巻 身体と生存の文化生態』203-224. 海青社.

池口明子・佐藤廉也(2014)「人類の生存環境と文化生態」池口明子・佐藤廉也(編)『ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第 3 巻 身体と生存の文化生態』13-57. 海青社.

佐藤廉也(2012)「フィールドワークと GIS」小林茂・宮澤仁編『グローバル化時代の人文地理学』59-75. 放送大学教育振興会.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 廉也 (SATO, Ren'ya)

大阪大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号: 20293938